園長通信～こころ～ №１２６

侏儒の言葉

2024.10.23

この前、ある人に言われた。「園長通信のわりには、幼稚園のことが出てこないんだけど」その通りなのである。園長が出している通信にもかかわらず、幼稚園のことが、あまり出てこない。園長通信とは言いながら、教育エッセイストとして書いている。「校長室だより～燦燦～」の続編、延長として書き綴っている。

「殻を破る」「勝負の授業」と、続けて中学校の国語の授業を取り上げた。殻を破ると書いて、ふと自分のことを考えた。「お前は、殻を破ったのか」今の自分に自問自答した。私の場合は、授業ではなく文章である。エッセイである。毎回、いろいろなことを題材にしながら書いている。相変わらず計画性はない。ただ、自分が書きたい文章はある。まだまだ思い通りのものは書けずにいる。あえて、今までの文章から挙げてみる。福島民友新聞の「随想」欄に掲載させていただいているものが、自分のイメージに近い。こういった文章を園長通信にもっと書きたいのだが、なかなか思うようにはいかない。もしかしたら、殻ができてしまっているのか。

先日、何気なく本屋さんに行った。こういうときほど、思いがけない発見がある。セレンディピティである。エッセイのコーナーに行ってみた。ある本が目に留まった。『随筆集　あなたの暮らしを教えてください　２　忘れないでおくこと』と『巻頭随筆　百年の百選』である。

前者は、『暮しの手帖』の「随筆」の中から、テーマごとに編成したものである。後者は、創刊１００周年を迎えた月刊誌「文藝春秋」の創刊号から続く企画「巻頭随筆」７０００を超える寄稿の中から選び抜かれた１００編である。

こういったものがよい。筆者は、作家だけでなく、その道の一流の人たちである。私にとっては、いわば教科書のようなものである。今、読んでいる最中である。好みの文章もあれば、そうでないものもある。一つ一つ、どれもがおもしろい。勉強になる。

文藝春秋、巻頭随筆の第１回の原稿が「侏儒の言葉」である。筆者は、あの芥川龍之介である。「侏儒（しゅじゅ）」とは、「見識のない人をあざけっていう語」である。何とも殊勝な、謙虚な芥川である。

そもそも本屋さんのエッセイコーナーに行ったのは、来年１月に刊行予定である自分の書籍のカバーデザインをイメージするためである。今のところ、書籍のサブタイトル候補が、「校長室だより１００選」となっている。それもあって、『巻頭随筆　百年の百選』に目がいったのかもしれない。本来の目的は果たせなかった。だが、思いがけないものと出合うことができた。これも運命であろう。これから、自分の文章の殻を破っていきたい。